



AYAKO IMAMURA ESSEY

*

世界は優しくささやく

- sounds so beautiful everyday -



photograph by Koji Matsumoto

vol.03 牛乳瓶のキャップ

去年の12月、名古屋市内にある小学校を訪れ、1年から6年まで200人の子どもたちの前でお話しさせていただきました。全校生徒の子どもたちに話すのは初めてで、1年生にも分かる言葉でいこうと、手話通訳者と打ち合わせました。体育館に入ると、400の瞳が私と通訳者を見つめました。どんな人なのかな。どんなことが起きるのかな。何を話すのかな、とわくわく感で輝いている瞳。その瞳の輝きに私は胸がじんとしてしまいました。

背が低い私のために用意してもらった段の上に立ち、手話で「こんにちは」とあいさつし、「今村彩子です」と自分の名前を表しました。真ん中の男の子が私の手話をまねて手を動かしているのが見えました。1年生の子どもたちは、「ろう者」はもちろん、まだ「手話」もテレビ番組の「字幕」という言葉も知りません。その言葉の意味を説明しながら、「ろう者を見たことある?」「手話、見たことある?」「聞こえないってどういうこと分かる?」と聞きながら話を進めました。私の問いかけに「ある!」と元気よく手を挙げる子どもたち。3番目の質問には分からなさとみんなが首をふりました。

聞こえる人たちにとっては聞こえないという経験がないので、全く聞こえないことがどんな状態なのか分かりません。

せん。耳をふさいでも外の音を全く遮断することもできないし、自分の体の中を流れる血管や心臓の鼓動などが聞こえるから、無音の状態は経験できません。

私は言いました。「テレビの音を消して見てみて。音がしないよね。何を言っているのか分からないよね。車の音も車の姿は見えないんだけど、私にとっては補聴器を外したら、音がしないんだ。友達と話している声も、笑顔で笑っているのが見えても声はしないんだ。子どもたちは真剣な顔で聞いていました。

最後に千種ろう学校の小学部6年生の子どもたちと聞こえない先生の様子を撮ったビデオを見てもらいました。そして上映後、子どもたちに聞きました。

「どうだった? 自分たちの学校とろう学校、どんなところが違うって思った? 自分の学校とろう学校の先生や友達のことでもいいよ」

すると、ハイハイと、また元気な声と同時に、小さな手がたくさん挙がります。一番前の1年生の男の子をあてると、「給食の牛乳のキャップが違う」と元気よく答えました。

私は苦笑しました。そのあと、さすが、ダメじゃん! 私!! と思いました。なぜなら、私が答えを求めていたか

ら。「ろう学校の子どもたちは手話を使っている。ぼくたちわたしたちと言葉が違う」という回答を求めて、子どもたちの感想を聞こうとしながらも、心から耳を傾けようとしてなかった、ずいぶん自分にすごく恥ずかしくなりました。

講演があったその夜、胸のあたりがもやもやしていました。あの牛乳のキャップが違うと言った子、あの子はどうしてそんなことを言ったんだろうとずっと考えていました。そして、あ! と気づきました。あの子は、聞こえない子どもたちと自分たちの間に違いを感じなかったのかもしれない。自分たちと同じようにろう学校の子どもたちも友達がいって、勉強でやる気をなくしたり(上映したビデオの中にもろう学校の子どもがやる気が出ない...と顔を覆ってしまう場面がある)、給食のときは授業とガラッと変わって元気になる、騒がしく先生や友達とおしゃべりしながら食べている。自分の学校と同じじゃんって。

ただ、給食で牛乳のキャップが違うことに目がいった。そして私の「どんなところが違うって思った?」という問いにそのまんま答えたのではないかと。

私は大人としての「正しい答え」を子どもたちに求めていた自分を怖いと思います。もっと怖いのは自分がその

行為をしていることに気づかずに、子どもたちを洗脳してしまっていること。私たちが大人にない素晴らしい発想をする子どもたちを常識に固まった大人にしてしまうことです。

子どもたちが学校で学ぶ「学問」は、「学び」「問う」もの。子どもたちの問いに、一緒に考えて答えを見つけていく過程が学ぶということが「学問」。子どもたちが問うと「それよりもこれが正しい」と無視されてしまうことが多い中、子どもたちの問いに、いったいどれだけの大人が彼らと一緒に考えているのでしょうか。

私は講演や大学の授業で多くの人たちを前に話す機会が多くあります。だから自分が間違っているかもしれない可能性や、自分の価値観、「正しい答え」を押し付けられないようにしようと気を引き締めました。そして、想像しました。

もしもこの世界が、牛乳のキャップが違うと言った子どもが、そのまんまの純粹な心でのびのびと育つことができると世界になれば、その世界はきっと豊かで素敵な時間と空間なんだろうな。

またあの子どもたちと会ったら、子どもたちの問いに私も一緒に考えて答えを見つけたいな。

映画
「架け橋」
きこえなかった3.11

地震が起きた11日後の3月22日から今年の7月までの2年4ヶ月の取材をまとめた集大成で、今年8月に新宿ケイズシネマで上映された。今後も大阪シアターセブン(10月26日~)や北海道(12月21日)などでの上映が予定されている。



今村彩子 いまむらあやこ
名古屋出身 / Studio AYA代表
愛知教育大学卒業 / 大学在籍中にカリフォルニア州立大学ノースリッジ校に留学し、映画制作・アメリカ手話を学ぶ。東日本大震災直後、宮城に向かい、被災者を取り戻す。全国各地で講演・上映活動もこなしている。主な映画「音のない3.11」「珈琲とエンピツ」「架け橋〜きこえなかった3.11」が、2013年11月CINEDEAF映画祭(ローマ)に招待。
<http://www.studioaya.com>